

2010. 3. 25

No.160

編集 樋口 みな子

E-mail minginga@agate.plala.or.jp
<http://briefcase.yahoo.co.jp/bc/ginganews150>
郵便振替「銀河通信」
02740-7-56535
(郵送6号分1,000円)



春を探して

3月も半ばを過ぎましたが、春が足踏みしていますね。夜中の雨に春近しと思う日もあれば、この数日は雪がちらつく寒さです。それでも日差しが暖かく感じるようになり

ました。

平日の午前、春を探しに野幌森林公園をデジカメを持って散歩しました。自宅から森林育種場を超えて大沢口まで歩き、ユズリハコースを巡って2時間。帰宅すると丁度お昼になります。

この日は寒かったですが、時折青空が見えてヤマガラが数羽群れで飛んでいました。ツツピーツツピーとスローテンポの歌声です。年中、森の中では耳にするけれど、写真に納めることが出来たのは初めてです。青空にヤマガラの背と胸腹のオレンジが鮮やかでした。

長塚節の名作「土」の一節に「春は空からそうして土から微かに動く」があります。見上げると綿菓子のような雲が浮かんだ明るい空でした。ふと、息子が小学生だった頃の春のある日のことを思い出しました。体調が悪くて学校を休んでいて、私は気にかかりながらも、おにぎりを作って出勤したのです。「一日、何してたの?」「天窓から流れる雲を見ていたよ」。一緒に空を見てあげたかったなと切ない気持ちになったことを。

我が家の庭はまだ雪に覆われていますが、近所の庭から土も見え始めています。野幌森林公園の小さな川からせせらぎも聞こえてきました。ぼんぼりのような花も見つけました。褐色の地味な花ですが、空を舞っているようで面白い。自宅に帰って調べたらタニガワハンノキ(コバヤマハンノキ)でした。何度も公園は歩いているのに今まで気がついていませんでした。ひとりで歩くと森にはいろんな発見がありますね。

バンクーバーオリンピック、パラリンピックが終わりました。話題のフィギュアスケートは特に楽しみました。高橋大輔選手が演じた「ジェルソミーナ」の選曲が良かったです。イタリア映画「道」の音楽です。高橋選手は、大怪我から復帰しての銅メダル。自らの人生と重ね合わせて演じたのではないのでしょうか? 伝わって来る演技でした。浅田真央さんの3回転半ジャンプも素晴らしかったです。挑戦する勇氣に感動しました。

新年号を発行してからあっという間に時がたちました。その間に本や映画も読んだり、観たりしたのですが、書き留めていませんでした。おかげで思い出しながら文章にするのに時間がかかりました。これからは忘れないように、メモする習慣をつけたいです。メールのように軽やかとはいきませんが、読みやすい通信であるよう努力したいです。



タニガワハンノキの花



野幌森林公園のヤマガラ



エゾリス

雪崩講習会を今年も受講しました。

雪崩から身を守り、冬山を楽しむために今年も雪崩講習会を受けました。北海道雪崩研究会主催の雪崩講習会は昨年の11月に理論講習から始まりました。

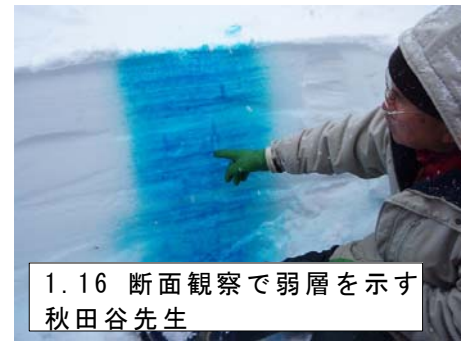
1月16日～17日は岩見沢北村にある北の生活館で23人の参加で研修会がありました。元北大低温科学研究所の教授であった秋田谷先生の講義が聞けるので、毎回楽しみにして参加しています。

1日目は秋田谷先生の「気象データから積雪を読み取る」方法論と積雪観察会が行われました。山に入るときは1週間前からの気象の変化を調べておくことが大事で、雪崩を予知することがある程度出来ることを

教わりました。午後から積雪断面観察法の講習を受け、秋田谷先生自作の簡易顕微鏡で雪の観察。右の写真は、私が初めて撮影したしもざらめ雪の写真です。

雪山ビバーク技術でスノーマウントの作り方を実習しました。雪洞は雪が十分になれば出来ないし、イグルーもたくさん的人数が必要ですがスノーマウントはかまくらです。ザックを重ねツェルトでくるみ雪を固めながら積み上げていく方法です。30分ぐらいで出来ました。強度を確認しましたが十分に使いそうでした。

夜は芳村講師が「雪崩発生メカニズム」をパワーポイントを使ってわかりやすく説明。本を読むより理解できました。



1.16 断面観察で弱層を示す
秋田谷先生



しもざらめ雪



1.24 中山峠スキー場周辺で
ビーコン搜索訓練

翌日はプローブ搜索とシャベリング訓練。実践的でとても役立ちました。

1月24日は中山峠スキー場周辺でプレ実習講習会でした。現場に向かう途中、五感を動員して積雪表面付近と新雪の結合状態や弱層を確かめながら、実習現場に進みました。実習はショベルコンプレッションテストやスキージャンプテスト（右写真）で危険度を判断する訓練、チームでリーダーを決めて2つのビーコン搜索を行い終了しました。



セルフレスキュー訓練
撮影・鈴木貞信さん

2月27～28日はルスツで今まで学んできたことを確認しながらの講習です。基本と中級クラスと講師陣合わせて77人の参加です。私は中級クラスで、不安がいっぱいでした。

ゴンドラを乗り継ぎ、スキー場から離れた、750m地点の重兵衛沼付近で実習しました。1日目は中山峠で行った訓練の復習です。圧巻は2日目のセルフレスキュー訓練。埋没者以外の残ったパーティが結束して組織的に搜索する訓練です。スキーで登山中、3人の仲間が雪崩に遭遇という設定です。リーダーの指示のもと、ビーコン搜索係、プローブ・ス

コップ係、見張り係、記録係と役割を決めて搜索が開始されました。チームワークを発揮することと今まで学んだことの集大成です。単独登山者の思わぬ埋没（設定外）もあり、半埋没者も含めて30分以内で4人の救出を必死で行いました。（左上の写真）

ある若いリーダーは、笛を使ってチームのコミュニケーションを取っていたのが、効果的で感心しました。気道確保した状態で埋没者になった人が最後までなかなか見つからずハラハラしましたが、チームワークで救出に成功。ツェルトに救助者を乗せる時、半分起こしその下にツェルトを入れると力が余りいないという発言もあり、私も医療の現場にいた頃の経験を思い出し、知識を共有することの大切さを改めて学びました。

日本山岳会北海道支部でも雪崩講習会を開いて2年目になります。1月30日に中島スポーツセンター前でビーコン操作講習会、2月6日にりんゆうホールで机上講習会、2月8日に藻岩山スキー場周辺で実習講習会を開きました。



撮影・鈴木貞信さん

森の命の躍動にリフレッシュ!



2月2日、今年初めてスノーシューで、岩見沢の利根別原生林を5人で歩きました。

視界不良のなか、10時半グリーンランドスキー場の左脇から森林地帯を歩き始めました。積雪が多くラッセルを交代しな



2.2 利根別原生林で

がら進みました。いわみざわ公園、かしの森、萩の山スキー場、見晴らしが丘、中央園地、大正池と、ミズナラやシナノキなどの森が素晴らしかったです。大正池近くでは双眼鏡で愛らしいシマフクロウを見ました。営巣木で眠っていたけど、今年はいいことあるかなと会えて嬉しかったです。間近にいる私たちの存在など気が付かない程夢中

なクマゲラのドラミングも聞こえ、高い木を見上げると、アカゲラまでドラミング中。こんなにたくさんの鳥に出会ったのは初めて。森の命の躍動に元気をもらいました。

私は久しぶりに歩いたので、大正池までの4時間でエネルギー切れ。さらに1時間近くかかって、三井グリーンランドの駐車場に着いたのは15:20でした。岩見沢のTさんお勧めのコースでした。

至福の3日間一パウダースノーを楽しみました。



美しい羊蹄山を望む

2月11日晴天。山の会のメンバー7人で足慣らしにチセヌプリに向いました。ニセコ連峰全山真っ白。先行者のトレースを利用させてもらいました。秋さん達4人の健脚組はズンズンと早いペースで進みますが私たち3人はゆっくりと登りました。山麓から見上げ数えると22名の登山者です。ほぼ無風状態でしたが



2.11 快晴のチセヌプリに向かう

普段は風の強い山頂付近は硬雪。つづいてやや重い深雪斜面です。ここまでを私はへっぴり腰で下りました。そこからはパウダースノーで、下手でもなんとか雪がカバーしてくれて楽しく滑りました。

帰りのコースは湯沼の尾根を降りました。やや樹木が多く傾斜は緩いのですが、ガスで視界が悪く先行した秋さん、S藤さんが崖に突っ込んだのです。幸い深雪で怪我せず良かったです。

2月12日、今日も晴天。最低気温はマイナス10度。小屋から羊蹄山がほんの一筋の雲を乗せて秀麗な姿を見せてくれました。今日のコースは京極コースです。800m以上にガスがかかっているが、崩れる気配はありません。先行する秋さんら5人が昨夜降った10センチほどの軽い雪をラッセルしながら、順調に高みを目指します。私たちはゆっくり組。やせ尾根は緊張しながら進みました。森林限界にきたところで大休止とし、1300mまで登った5人を待っているうちにあっという間に降りてきて合流。傾斜のきつい部分は別として下るほどにパウダースノーを楽しめました。K口さんとK保さんはテレマークスキーを華麗に操り滑降。緩斜面ではsimaさんのビデオ撮影もあり、滑りの講評をしながら下山。素晴らしい羊蹄山を満喫しました。

山小屋に早くに到着したので、温泉に。ひなびて安い温泉にとルスツ温泉に行きました。5人も入ればいっぱい温泉は、年配の女性客でいっぱい。私たち女性2人は、洗い場が空くのを待って入浴を終えました。入浴料は200円也。

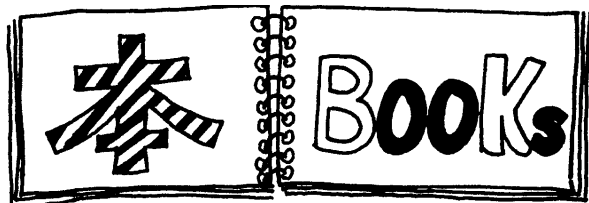


2月13日快晴、無風!!メンバーは昨日までの5人に、UさんとKさんが加わり7人です。

まずは、京喜茂尾根に取り付くためトラバース。うっすらと踏み跡があり、視界良好で難なく取り付き地点に到着。隊列は、先行隊とゆっくり隊に別れ、順調に高度をかせました。12:30になり、先行隊の3人は京喜茂コースの1,350m地点(ポコの中腹)、Hさん、Uさん隊が1,250m地点、ゆっくり隊の私たち3

人が1,100mに到着。

雪質は、上部は若干クラスト、中段以降は見事な深雪です。一気に滑降!!とにかく素晴らしい斜面で、スキーが下手な私でも気持ちよく滑ることができました。3日間も滑って雪に対する怖さが少し無くなったのが嬉しかったです。習うより慣れろですね。



「カデナ」

池澤夏樹著 新潮社 1900円



1968年、沖縄ではハノイに向かうB52機が、嘉手納基地から続々と飛び立っていました。本書は沖縄を舞台にベトナム侵略戦争に反対する活動に参加した人々を描いています。

68年のひと夏を語る3人の語り手は太平洋戦争の傷跡を深く残している沖縄の現代史そのものです。

アメリカ将校の父とフィリピン人の母を持つ米空軍の秘書をしているフリーダ。沖縄からサイパンに移住し、捕虜の体験を経て嘉手納で、模型と無線の店を営む朝栄。内地に渡った父に捨てられ、母を自殺で失ったドラマーのタカ。彼らはベトナム人の安南が

計画したスパイ活動に加わり、たった4人で米軍の北爆計画を失敗させるのです。テーマは重いのに、文章はどこかユーモラスで軽やかです。ある新聞評には「スタンド・バイ・ミーを思わせる甘酸っぱい切なさをたたえている」とありました。著者の意図もそこにあったようです。「大きくて強い組織に小さくて弱い者がどう立ち向かえるか。徒手空拳ながらやれることがある。それも歯を食いしばらずに」。と語っています。

作品には、彼らがこうした危険な活動に参加する動機が語られます。フリーダには、市街戦に巻き込まれて、どちらから砲弾が飛んでくるか、どの空から爆弾が降ってくるか、それもわからないまま逃げまどった体験があり、今のハノイの4歳の少女と重なります。朝栄は、サイパンでたくさんの死者を見た記憶がありました。タカはベ平連の脱走兵を亡命させる活動にも加わったのは、アメリカ人の養子になってアメリカで高校生活を終えたが、徴兵があることに気づいて帰国したいきさつがありました。

それぞれの生い立ちや国籍も複雑ですが、自分は何をすべきか考え、行動する姿がすがすがしい。

つい先日は、核密約の文書が明らかにされたばかりです。その中で嘉手納基地からB52撤去後も自由な飛来を容認することを了解していたことが分かりました。地上戦で多くの犠牲を払い、今も基地問題を抱える沖縄。いつまでも日本は沖縄に犠牲を強いていいのかと考えさせます。70年安保の熱気に押されるように、私も東京で反戦デモに参加しました。タカが言う「英雄ぐわーし（ごっこ）」だったのかなと、青春のほろ苦さも思い出させてくれました。

ひとりひとりの個人が、過去の歴史に向き合い、つながって平和への大きな力にもなり得ることに励まされました。434ページの大作ですが、魅力的な人物群に引き込まれて一気に読み終えました。その後の4人がどう生きたのかも知りたくなりました。

「インパラの朝」 ユーラシア・アフリカ大陸684日

中村安希著 集英社 1500円

26歳から2年間、中国、東南アジア、インド、パキスタン、中東、アフリカと47カ国を旅した記録です。

開高健ノンフィクション賞受賞作と帯にあり、題名と装丁、それに著者本人の美しい写真に惹かれて買い求めました。どんな旅をしたのか楽しみに読み始めたのですが、2年間もの長きにわたって旅した臨場感は伝わってきません。特にユーラシア大陸の旅は、各地で会った人々と起こった出来事を断片的につなげただけで、どうやって移動して旅を続けたのかまったく記されていないのです。すごい冒険の旅と思って読むと期待はずれで、最後まで読み通すのが苦痛になりました。章ごとに簡単な世界地図でコースが示されていますが、これを見ないとどこに行ったのかさえ不明です。旅を続けるのに困難にも突き当たるのですが、対処の仕方もクール。偽装結婚も2度しました。しかしアフリカを旅する頃からペンが走り出します。タイトルになったケニアでのインパラを見た時から中村さんの意識が変わったのかも知れません。

印象的な場面です。「私の眼前に一頭のインパラが現れた。黄金の草地に足を着き、透き通る大気に首を立て、たった一頭でたたずんでいた。一静かにそこに立っていた。インパラの濡れた美しい目は、周囲のすべてを吸収し、同時に遠い世界を見据え、遙か彼方を見渡していた」とあります。

アフリカは貧困の国という先入観がありました。著者はウガンダの孤児院で、2週間ボランティアをして、子どもたちにとって何が一番必要なのかを考える毎日だったと記します。ただ、お金と物資を提供することが適切な支援なのだろうかと考えさせます。この土地では、将来を豊かに暮らせるかどうかは作物の生産力の向上と持続性にかかっていると痛感するのです。

ここまで読み進んで、著者の旅の目的が、貧困や環境問題の現実をこの目で確かめ、支援のあり方や、自分の生き方を考える事だったのだと理解できました。(5ページに続く)



そもそも684日の旅を一冊にまとめるというのは至難の技で、インパラの朝ーアフリカで考えたことといったタイトルの方が良かったのではと思いました。

新聞のインタビューで「旅は私にとって学校です。自分の無知と弱さを思い知らされ、世界と人間への信頼を学びました」と語っていました。謙虚さが良かったです。危険地帯に入って行った勇氣には助けてくれた人々との出会いがありました。アメリカで学んだ語学力がコミュニケーションに役立ったのではと羨ましくもありました。



自然公園シリーズ 1

「登山道の保全と管理」渡辺悌二編 古今書店 3500円

日本の登山道荒廃と登山道の維持管理に関する最新の成果をまとめたのが本書です。

第1部では、登山道問題を考える前提として登山道の特性、登山の歴史と現在の登山の特徴、中高年登山ブーム、日本百名山ブームの現状と課題などを整理し、第2部では大雪山国立公園での研究成果を中心に、日本の登山道の荒廃の現状とその原因について議論、登山道荒廃の調査手法を紹介しています。第3部では、従来から用いられている登山道の維持管理の工法を紹介し、その問題点についても述べ、今後、適用の可能性が高い工法についても紹介。第4部では新しい維持管理の考え方とその実践について議論を行っています。

特に渡辺悌二氏らが大雪山国立公園である黒岳石室周辺および旭岳姿見の池周辺で13年にもわたる長期観測した調査が興味深い。登山道断面の変化は、土壌浸食に人為的影響が大きく関わっていることが明らかであることが分かります。登山道の複線化、植生破壊を含めた登山道の荒廃の仕方は、利用者の歩行パターンや利用時期によっても大きく変わると検証し、渡辺氏は同時期に集中して登るのではなく、山に負荷をかけない分散型の登山を、ツアー会社や地元山岳会、行政、研究者などと協議しながら進めていきたいと提言しています。

過剰利用を防ぎ、季節的な利用の休止を進めるなどで、ある程度の土壌浸食は軽減されたとしても、登山道荒廃の問題は解決しないと述べ、地元コミュニティを中心とした、大規模公共事業によらない山岳地域の自然環境維持、管理システムの構築の必要性を提言しています。私も高山植物保護のネットワークで11年間活動してきて、さまざまな分野の人たちと力を合わせることの大事さを学びました。

私たち、登山者も環境に配慮した歩き方を実践していかなければと思います。

オーストリアのコジアスコ山での従来の木道から金属メッシュ・ウオークに替えて、植生回復が進行している事例の紹介もあります。今後、日本の山岳自然公園で導入してもいいのではと思いました。

研究書ですが、登山道荒廃の断面図や、荒廃が著しい大雪山系の白雲岳、高原温泉から緑岳、裾合平から中岳分岐、北海岳と北海平間、姿見から裾合平間などの写真も豊富で読みやすい構成になっています。高いので図書館で探して読むことをお勧めします。

「おとちゃん見ててな」木津川上流の里山を守った独居ばあちゃん奮闘記

吉田みさを著 合同出版 1400円

夫の転地療法のため、1986年に奈良県から三重県上野市（当時）に転居し、すぐに産廃の野焼きの煙害におそわれ、以来12年間に及ぶ産廃廃棄物処理業者との長い闘争を吉田さん夫婦で闘い勝利します。見届けた夫は逝去しますがその記録は「おかちゃんおおきに」としてみさをさんが出版しました。

その喜びもつかの間。自宅からほんの少し離れた山林の一角に、不気味なごみ山が姿を見せ始めるのです。またもや胸が苦しくなるような異臭に苦しめられるようになり、みさをさんは、ニュータウン自治会長としてたったひとりで、立ち上がるのです。新たな会社の産廃処分場増設計画が持ち上がります。その後も古畳や木くずの不法投棄などが続き、みさをさんは県や市に現状を訴え続けました。市職員はなかなか耳を貸そうとせず、門前払いを受けながらも市民の立場になって考えてくれる弁護士の助言や、マスコミにも報じてもらい、粘り強く闘うのです。ついに、知事が産廃処分場増設申請を不許可の決定します。その5年間の闘争の記録が本書です。

現在79歳。パワフルな行動力に圧倒されました。住民の健康など意に介せずの産廃業者に怒りを覚えました。みさをさんの熱意にほだされて、周りに支援者が増えていく様子が目に見えるようです。

折々に詠んだ短歌は夫への思いがあふれていてその夫婦愛に感動しました。その一つ 吾が背中 まろくなりしを天国の 夫（つま）に押されて 今日も無事なり

現在は全国の産廃物問題の運動に加わるかわら、地元の小学校などで、自らの体験を語り伝える活動を行っています。

伊賀上野に移り住んで24年。今では大切な第2のふるさとだと語るみさをさん。豊かな自然を取り戻した嬉しさが伝わってきます。



映画

1～2月はたくさんの映画を観ました。インビクタス、食堂かたつむり、ジェイン・オースティン秘められた恋、カティンの森、キャピタリズム、抱擁のかけら、50歳の恋愛白書。「映画の招待券もらってるの？」と聞かれることがあります。招待券が手に入る人はいいですね。全部は紹介しきれませんがまだ「上映中の映画」に間に合わなかったようです。少し古い映画は蠍座に期待しましょう。

「インビクタス 負けざる者たち」

クリント・イーストウッド監督（米）

1994年、南アフリカ初の黒人大統領になったネルソン・マンデラ（モーガン・フリーマン）。その最初の仕事が白人職員に協力を求め、昨日まで黒人を迫害していた白人警官を自分の護衛に加えることでした。27年間も獄中にあったマンデラが憎しみではなく赦しをと黒人同胞に呼びかけるのです。家族からもなかなか理解されないのですが未来を見つめるマンデラの意志が胸に響きます。



95年、自国で開催のラグビーワールドカップを機に、主将のピナール（マット・ディモン）を官邸に招き語り合い、ワールドカップ優勝の目的を掲げるのです。ラグビーは白人の競技で、代表チームのスプリングホクスもアパルトヘイトを意味する存在でした。ラグビーで黒人と白人の人種融和を図ります。チームには強くなることだけを求めるのではなく、黒人居住地区で少年達のコーチをさせてラグビーの浸透も図ります。マンデラの願いが底辺にまで広がって行きます。

マンデラは自らの心の支えである詩「インビクタス」の一節をピナールに伝えるのです。「私が我が運命の支配者 我が魂の指揮官」という言葉でした。どんなに理不尽な扱いを受けたとしても、誰からも支配されないとの不屈の信念があればこそでした。ピナールは、今は観光名所になっている刑務所跡を訪ね当時のマンデラに思いを馳せます。マンデラの人種差別も戦争も無い世界への強い思いを受け止める大事なシーンです。

世界最強のニュージーランド代表との決勝戦でクライマックスを迎えます。南アフリカ中が熱狂し、黒人も白人もひとつになって応援する姿がありました。ラグビーを通して、反目しあっていた大統領警備官が仲良くなったり、試合会場周辺をうろついていた黒人少年と白人警備員が勝利を喜び合ったり、あちこちで、融和のドラマがあり、イーストウッドらしい、ユーモアもありました。赦せる心があれば人を変えることもできるのですね。ラストの音楽がいい。手をつないで世界を変えようと歌い、イーストウッドのメッセージが胸をたたくのです。（音楽はジュピターです）

昨年の「グラン・トリノ」といい、78歳とは思えぬ若々しい情熱に、私も背筋を伸ばして新しいことに挑戦しなくてはと思いました。

南アフリカで撮影を終えたイーストウッドは、車中から黒人の子どもたちが、ラグビーボールを追う姿を見た時、同乗していた地元の白人男性が「W杯後、国中にラグビーチームが出来ましたよ」と言うのを聞き、マンデラの選択が草の根まで効果をもたらしたのを実感したと語っていたと記事にありました。

息子にも「歴史のことは知らなくても観れば理解できるし、是非観ておいで」と勧めました。友人と観てきた息子は「すごく良かった！南アフリカの歴史が分かった、音楽が良かった」と絶賛していました。



©2010「食堂かたつむり」フィルムパートナーズ

「食堂かたつむり」 富永まい監督

失恋からのショックで失語症になった倫子（柴咲コウ）は母ルリコ（余貴美子）のいる田舎に戻り、小さな食堂を始めます。お客は1日1組だけ。それぞれの客に思いをはせて作る料理は、食べた人たちの人生に小さな奇跡をもたらすと評判になります。豪華ではないけれど、何故か懐かしく温かいのです。料理の力が人を変えるということを見せて、母子の関係も変化していきます。ある日ルリコが末期がんだと打ちあけます。母から愛されていない

と思いこんでいた倫子がルリコのために料理を作るのです。倫子はどうなるの？ラストに素敵な奇跡が待っていました。人生って捨てたもんじゃないかと幸せな気持ちになりました。

柴咲コウは一言もしゃべらない演技でしたが、人の話に耳を傾け、丁寧に作る料理でやさしい表情に変わっていきました。生きることは食べることと改めて思いました。最近、料理がスパイスの映画多いですね。かもめ食堂、南極料理人、恋するベーカリーなど。

私にも少し変化がありました。日々美味しい料理を作ろうと、ヘルシーな材料と味付けは薄味で素材を生かした料理を只今実践中です。家族から「美味しいね」といわれるのが励みです。

「カティンの森」 アンジェイ・ワイダ監督（ポーランド）

祖国の悲劇と抵抗の歴史を描き続けるポーランドのアンジェイ・ワイダ監督。「地下水道」「灰とダイヤモンド」等で知られます。

ワイダ監督の父の命を奪い、母を苦しめた第二次大戦中の虐殺を改めて「今」に問うた映画です。

1939年、ポーランドにナチス・ドイツとソ連軍が侵攻します。アンナはポーランド軍大尉の夫がソ連軍捕虜として連行される姿を目撃しま



「カティンの森」から

す。3年半後、ドイツは「虐殺された多数のポーランド人将校の遺体を発見」と発表しますがアンナは夫の死を受け入れられません。

159号で本の紹介しましたが、この虐殺は「カティンの森事件」と呼ばれています。ポーランド東部を占領したソ連が1940年に捕虜にした15000人のポーランド人将校を虐殺したのです。

ワイダ監督が映画化を構想しはじめたのは半世紀後でした。戦後、ソ連の強い影響下に置かれたポーランドはソ連を糾弾することが出来なかったのです。冷戦期、この事件はドイツの犯罪とされていました。

ワイダ監督は戦争で残された人たち、特に多くの女性の話を描きたかったと語っています。残されて生きる者をも苦しませ続ける戦争の現実を直視させます。

映画のラスト、手を縛り、後頭部を打ち抜き、埋める。一虐殺場面はまるで流れ作業のように残酷に映し出されます。私はワンシーンを見ただけで目を覆ってしまいました。

長く真相は、闇に葬られてきた「カティンの森」事件。個人と民族の歴史がどうねじ曲げられたかを描き、歴史の真実を忘れてはならないと訴えます。

ドイツ映画もそうですが、戦争の歴史を検証する映画がたくさん作られています。邦画では戦争の真実を伝えるものが圧倒的に少ないと思います。戦争を知らない世代が増えています。語り伝えることの大切さを胸に刻みました。



「ジェイン・オースティン 秘められた恋」

ジュリアン・ジャロルド監督（イギリス）

ジェイン・オースティンは「高慢と偏見」「分別と多感」など平凡な日常生活における人とのつながりをテーマにした小説を発表したイギリスの作家として知られます。生涯独身でしたが知られざる恋を経験していたと伝記作家のジョン・スペンスが書いたことがきっかけで

生まれたのがこの映画です。

時代は18世紀のイギリス。ジェイン・オースティン（アン・ハサウェイ）は貧乏な牧師の末娘。とはいえ教育を受け、知的で自分の意見をはっきり言う自立心旺盛な女性です。小説にも出て来ますが、母はお金持ちに嫁ぐことが娘の幸せだと信じて疑いません。その頃から、周りの人々を観察した小説を書き始めていたジェインは、母の言葉に従うような従順な女性ではありません。美しい上に、我が道を進むジェインが素敵でした。

ある日、彼女の住む田舎に法律家の卵であるトム・ルフロイ（ジェームズ・マカヴォイ）がやってきます。一見、遊び人のようなトムと勝気なジェインは反目しあいますが、やがて惹かれ合うのは当然の成りゆきでした。現代では考えられませんが、親の望む結婚ではないために、さまざまな妨害を受けます。トムの後見人に、「ジェインには別の男性がいる」というデマの手紙が届けられたり。一度は結婚をあきらめながら、二人の思いは高まり、全てを捨てて駆け落ちするための馬も整えるのです。旅の途中、トムを待っているときに届いた彼の家族からの手紙を読み、トムの家もジェインのように貧しく法律家として稼がなくては家族を養うことが出来ないことを知ってしまいます。ジェインは「家族を犠牲にした愛はやがて懺悔と後悔の念に蝕まれていくわ」と別れてしまうのです。

トムとの恋を封印し、その後の人生を作家として生き41歳で亡くなりました。ジェインの小説にはトムは登場しませんが、作品には大きな影響を与えたのではないかとされています。

アン・ハサウェイが清潔な美しさと気品があり、ジェインの魅力を十分に演じていてすっかりファンになりました。



1.10 幌加内の坊主山は氷点下15度。樹氷がきれいでした。

2.6 JACの雪崩講習会に講師としてきて下さった麗子さんと札幌雪祭りを見学しました。



映画紹介

購読料をありがとうございます
1.1~2.24 (敬称略)

朝日守 (さいたま市) 3,000円 (18号分) 佐々木純一 (雨竜町) 3,000円 (カンパも含む) 伊藤泰弘 (札幌市) 1,000円 尾寄弘子 (札幌市) 2,000円 (12号分) 京極紘一 (札幌市) 2,000円 (12号分) 太田肇・朋子 (鎌倉市) 2,000円 (12号分) 田中清子 (岩見沢市) 5,000円 (カンパも含む) 沼崎勝洋 (小樽市) 2,000円 (12号分) 土岐政美 (札幌市) 2,000円 (カンパも含む) 藤内英夫 (札幌市) 5,000円 (カンパも含む) 但馬桂子 (江別市) 1,000円 小野寺則之 (小樽市) 1,000円 斉藤浪子 (当別町) 2,000円 (カンパも含む) 福原正和 (札幌市) 5,000円 (カンパも含む) 新井喜美子 (北広島市) 2,000円 (12号分) 後藤言行 (小樽市) 3,000円 (18号分) 中村秀子 (千歳市) 図書券3,000円分と花ギフト券 匿名 (札幌市) 80円切手300枚合計41,000円と切手は印刷と送料に使わせて頂きます。ありがとうございます。

160号の発行が遅れましたことをお詫び致します。恐縮ですが購読を希望される方は6号分1,000円のお振り込みにご協力お願いします。ATMの利用が便利です。PCで読む方は無料ですが、カンパも歓迎です。

キャピタリズム〜マネーは踊る



鏡社会の危険性を描いた「ボーリング・フォー・ロンバイン」、ブッシュ政権のイラク戦争を痛烈に批判した「華氏911」、企業本位の医療保険制度に切り込んだ「シッコ」などの作品で知られるマイケル・ムーア監督が、アメリカの資本主義にスバリ切り込んだドキュメンタリー映画です。

2008年9月、リーマン・ブラザーズが破綻。多くの米国民が住宅ローン

を払えなくなり、銀行に家を差し押さえられます。映画は、何台ものバトカーを連ねてやって来た保安官が家のドアを破って立ち退きの強制執行をする衝撃的な場面から始まります。

差し押さえられた家の前で泣きながら家具を燃やす夫婦。突然解雇されて路頭に迷う労働者たち。受取人を会社にした生命保険を社員にかけ、社員が死ぬと保険金を全部会社が手に入れた事を知って妻や家族が怒る一幕など、まるで今日日本

で起きていることを見せつけられているようです。資本主義が暴走し始めたのは、レーガンが大統領になり、弱肉強食の新自由主義がウォール街を支配するようになってからだ、ムーア監督はスビーテイな映像で畳みかけるように訴えます。1%の富裕層のために減税と規制緩和を進め、多くの人たちは懸命に働いても貧しい暮らしを余儀なくされています。

現在、アメリカの失業率は10%に達します。資本主義は合法化された強欲なシステムだというメッセージが全編を貫き、この不公平なシステムをただしたいという熱い思いと怒りが伝わってきます。

突然工場を解雇された労働者たちが団結して、全国的な支援を受けて銀行から解決金を勝ち取る闘いも描かれます。立ち退かされた住宅の封鎖を地域住民が解除した闘いもあります。泣き寝入りする市民ばかりではありません。

弱い人々への共感と慈愛にあふれ、民主主義ってこういうことなんだと胸にストンと落ちました。深刻なテーマですが怒りをユーモアにかえて描かれています。経済の仕組みがさまざまな事例を通して理解できます。政治に無関心であってはならないと思いました。若い世代の人達にこそ観てもらいたい映画です。(樋口みな子)

本州から桜の開花を知らせるお便りが届きました。今朝の野幌はまた冬に戻ったような雪景色です。先日、春を探して野幌森林公園を歩いてきました。春は空から、土から……。1面の記事で春を感じていただけたらと思います。

08年5月に発行の150号からようやく160号に達しました。だんだん書くスピードが落ちていきます。もう少し続けられるかしらと思いつつ1週間もかかって編集を終えました。読んでいただけたら嬉しいです。(みな子)